

評伝 矢田津世子(一)

花田, 俊典
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/16321>

出版情報 : 文献探究. 1, pp. 17-25, 1977-08-08. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :



評伝 矢田 津世子 (一)

はじめに

冒頭から逃口上で申し訳ないが、一種の義務感もあって、はじめに弁明しておくことを許されたい。まず、私の矢田津世子に関する調査は第一段階にも満たぬ、従ってお世辞にも結果・成果・業績とは呼べぬ代物である（もっともそこを目指してはいるが）。にもかかわらず、ここに〈若い研究者〉の〈無智な蛮勇〉を奮うのには、それなりの理由があつたのである。周知のように、矢田津世子は、（私が研究している）坂口安吾の初恋の（？）女性であり永遠の恋人である。安吾が再評価されて以来、その名はしばしば口になれ二人の恋が論じられている。今日、安吾研究者側によって出されている結論は、安吾の回想記は甚だ虚構を含むものであり、安吾によって語られている矢田は現実の矢田とは異なる〈文学的存在〉であり、二人の恋の真相はおそらく安吾の片想いにすぎない、ということに落付いている。だが、安吾側からの一方的な者証だけで二人の恋の真相を断定する心もとなさば言うまでもない。次に、いわゆる文学と実生活という見方をする場合、文学とは作家の作品そのもの或いは作品

花田 俊 典

生活自体であると思ひなすことが出来ようが、実生活とはそれでは何であるか、という疑問が私にある。つまり、虚構（フィクション）に對置されるものとしての実生活（現実）の問題である。例えば、安吾が矢田と訣別し京都へ旅立ったのは、「女占師の前にて」（昭三）では「この年（昭和十二年）花田注」の一月終りのこと、「古都」（昭一）では「昭和十二年早春。宇垣内閣流産のさなかであつた」（一月二十九日）花田注」と書かれている。ところが戦後出版された『吹雪物語』（昭二）の後記「再版に際して」には「昭和十二年、丁度、節分の前夜であつたと思ふ」と書かれており、先の記述とは一致しない。この違いを関井光男氏は「伝記的年譜」（昭四）でとりあげ、「節分の前夜」との記述は安吾の「記憶違いである」とされているが、成程そのように考えるのが、種々の点から考えてみても、最もナチュラルであり、妥当な推定であると思われる。その真偽のほどは今は置くとして、関井氏は「伝記的年譜」の中で、「記憶違い」と「虚構」を両用され、今見た例では「記憶違

い」を適用された訳だが、この二つのボキヤブラリイの使用例の背景には大きな（そして当然素朴な）問題があるように思う。まず、安吾が戦後「節分の前夜」であつたと思う」と書いた時、そしてそれが、もし客観的な意味での歴史的事実に反していると証明されたならば、我々は何れのボキヤブラリイを使用すべきなのであろうか。虚構（フィクション）なる語に作家の意識的なものと無意識的なもの（おそらくこれを「記憶」と呼ぶことが出来る）が考えられるにしても、歴史的事実（もし再生出来るとすれば）と作品中の記述の一致・不一致をもってフィクション・ノンフィクションの区別は簡単には為されない筈である。関井氏の記述によれば、「節分の前夜であつたと思う」という一文に安吾の意識的な虚構化の意志はなかったことになるが、可能性の問題として話を進めれば、そうとも言い切れない。その根拠をいくつか示せば、まず、安吾という作家は事実を忠実に記そうとする姿勢が根本的に欠けていることが挙げられる。次に、「この年の一月終り」・「宇垣内閣流産のさなか」・「節分の前夜」の各々持っている読感の問題を考えねばならず、同時に作家の、そしてまた読者の時代性を無視することは出来ない。つまり、「宇垣内閣流産」は戦後の意識（少なくとも安吾の）では死語化しており、故意

に「節分の前夜」を用いたか、京都への旅立ちのイメージが戦前と戦後の安吾では既に変化しており、「宇垣内閣流産」という硬質のイメージにそぐわず、敢て軟質の「節分の前夜」を用いた、とも考えられなくはないのである。

閑話休題。文学と実生活、或いは事実と創作、そしてまた歴史と歴史ばなれと言う時、実生活・事実・歴史なる語には、二重の意味を考えておかねばなるまい。個人に意識・記憶されたる現実と、より客観的な意味での現実と。正直に言って、今の私には、後者の意味での現実が文学（作品）研究にどの程度密着にかかわってくるのかよくわからない。それが故に、この問題は、私の楽しい夢でもあるわけだ。坂口安吾がとらえた現実と矢田津世子がとらえた現実と、そして二人を包む歴史としての現実が、私の中にそして私の周囲に新たな現実として構築されていくことが、楽しくなかつたらう筈がない……………傾首。

第一回

作品年譜（稿）

作家以前の矢田津世子

矢田津世子作品年譜(稿)

昭和五年(二十四歳)

三月、「嗤ひを投げ返す」(女人藝術)

九月、「女人藝術講演会・連盟・記録」(女人藝術)

九月、「生活断章―女三人―」(女人藝術)

十二月、「反逆」(女人藝術)

「鼠を跳び越える女」懸賞小説」(文學時代)

昭和六年(二十五歳)

二月、「寄生虫と或るタイピスト」(作品)

三月、「勤倅」(文學時代)

八月、「村の名物―コント―」(女人藝術)

「波紋」(文學時代)

九月、「第五信―B―」(文學時代)

※中村正常との「艶書往来」

十月、「綺譚倶楽部物語」(文學時代)

十一月、「新しい時代の戀愛・結婚・貞操に就て語る」(新潮)

※座談会

十二月、「冬はまづ海から」(近代生活)

昭和七年(二十六歳)

一月、「こんな私」(近代生活)

二月、「硬いクッション」(文學時代)

「吉行エイスケ氏」(新潮)

三月、「神聖な事業」(新潮)

四月、「白い舗道」(文學時代)

五月、「あほう鳥」(若草)

〔注〕

『文藝春秋』昭和七年一月号の広告によれば、『婦人サロン』昭和七年一月号に「斜

面」を発表しているが未詳。

昭和八年(二十七歳)

一月、「露・プッペの事ども」(作品)

三月、「川端康成氏への手紙(手紙七信)」(新潮)

五月、「文學の新精神を語る」(櫻)

※座談会

六月、「老友を語る」(文化集團)

十二月、「山小舎を営む」(文藝)

昭和九年(二十八歳)

一月、「発作」(作品)

七月、「主人」(婦人文藝)

「吾が企画する長篇小説の内容と抱負」(文

藝) ※アンケート回答

八月、「旅役者の妻より」(文學界)

九月、「この日頃」(文藝)

譯編『若草日記』(少女畫報社)出版せる。

※或は『若草物語』か? 未見。

十月、「意識のことにふれて」(文藝通信)
十一月、「月評に就ての感想」(文藝通信)

昭和十年(二十九歳)

二月、「懸賞小説の思ひ出、埋もれて了った作家」(文藝通信)

※アンケート回答

三月、「菊池寛氏その他」(文藝通信)

※「女流作家の文壇人印象記」の一。

「若園さんの御仕事」(紀元)

五月、「母のこと」(若草)

九月、「嬉しかったこと・楽しかったこと・口惜しかったこと・癪に触ったこと」(文藝通信)

※アンケート回答

十一月、「父」(日暦)

十二月、「問題に見たい事」(文藝通信)

※アンケート回答

昭和十一年(三十歳)

一月、「感性の鋭さ―宇野千代氏『ひとの男』」(日暦)

※書評

二月、「桐村家の母」(文藝)

三月、「神楽坂」(人民文庫)

「簡野さんの話」(人民文庫)

「藝三味―里見禪氏『混り合ふまで』」(日暦)

※書評

「日記より」(文藝通信)

※「作家の感想」の一。

五月、「宇野千代氏の『僕』」(人民文庫)

六月、「蔓草」(人民文庫)

「若もの一席語」(人民文庫)

※座談会

「三疊独語」(文藝)

「陰晴」(文藝通信)

七月、「やどかり」(改造)

八月、「落合日記」(文藝)

「或る午後」(日暦)

「お庭拝見」(人民文庫)

九月、「鹿について」(人民文庫)

十月、「妻の話」(人民文庫)

※連載小説。十一月。

「秋夢」(文藝通信)

※「秋風日記」の一。

十一月、「大谷藤子氏への返信」(文藝通信)

※文学問答

十二月、「女心捨遣」(文学界)

「故旧忘れ得べき」を読んで」(人民文庫)

「一、本年度評論賞を与へるとすれば誰に？」

人とその作品)一、その理由」(文藝)

※アンケート回答

小説集『神楽坂』(改造社昭11)刊行。

「父」「蔓草」「神楽坂」「弟」「旅役者の妻より

「秋扇」「桐村家の母」「女心拾遺」「やどかり

以上九篇を収む。三六九頁B6¥180

《注》「弟」「秋扇」の二作品は、初出年次

誌名共に未詳。

昭和十二年(三十一歳)

一月、「櫻を眺めて」(文藝)

「或る少女の手記」(文藝)

「假面」(日本評論)

「希望ひとつ」(人民文庫)

「働く女性は斯く視る」(人民文庫)

※座談会

三月、「方言にふれて」(日曆)

四月、「上野」(文藝)

七月、「地主」(人民文庫)

「墓地にて」(日曆)

八月、「去り行く日」(文藝復興第三号)

九月、小説集『假面』(版画社、版画社文庫13昭12

9)刊行。七一頁B6(19センチ)¥1020

「花火」「妻の話」「假面」を収む。

《注》「花火」は初出年次・誌名共に未詳。

十一月、「ルスキイ・ドム」(人民文庫)

昭和十三年(三十二歳)

一月、「歳月」(月刊文章)

七月、「祖父」(文藝)

十一月、「秋袷」(中央公論)

十二月、「街の原色」(ひのもと)

「凍雪」(未詳)

昭和十四年(三十三歳)

三月、小説集『花蔭』(實業之日本社昭14)刊行。

B6(19センチ)¥180

「祖母のために」「秋の鏡」「花蔭」「貧しき席

「姉妹」「愛ゆゑに」「距離」「野道」「空蟬」「秋

窓記」を収む。初出年次・誌名共に未詳。

「後記」によれば、「この書におさめた小

説は、雑誌「新女苑」に發表したものを主

にして、若い同性の友へ贈る心から編んで

みた」とある。

七月、「痴女抄録」(改造)

十月、「憑かれて」(文藝)

昭和十五年(三十四歳)

一月、「家庭教師」(實業之日本社昭15)刊行。

三月、「魚歌」(文藝)

六月、『巢燕』（白水社昭156）刊行。

B6（1974）三八五頁、1.50

七月、『松本の縁者』（未詳）

昭和十六年（三十五歳）

一月、小説集『女心拾遺』（筑摩書房昭16・1）刊行。

B6（1974）三五七頁、2.00

『秋裕』『凍雪』『祖父』『歳月』『魚歌』『松本の縁者』『病女抄録』を収む。

二月、『茶粥の記』（改造）

三月、『或る日』（文壇者）

六月、『車中にて』（現代文学）

八月、『茶粥の記』（實業之日本社昭16・8）刊行。

『未完の告白』（堀口大学訳『未完の告白』第一書房昭16・8改版初刷）

※『未完の告白』の初版は昭11。矢田の文も昭11か。未確認。

十月、『鴻ノ巣女房』（文藝）

十一月、『橋』（知性）

十二月、『本年度の文学作品で好きな水書か水書下の関心も惹いたものは何か？』（現代文学）

※アンケート回答

『駒鳥日記』（富士書房昭16・1）刊行。

※或は富士書店昭16・12か。未確認。

昭和十七年（三十六歳）

一月、『結婚式』（未詳）

三月、『寓話』（知性）

四月、『萬年青』（未詳）

八月、小説集『鴻ノ巣女房』（豊國社昭17・8）刊行。

B6二四〇頁、2.00

『鴻ノ巣女房』『橋』『結婚式』『祖父』『萬年青』『寓話』『あとがき』を収む。

〔追加〕一隅（『火の鳥』昭7・1）

『現代日本文学大事典』（明治書院昭和11）の矢田津世子の項には、板垣直子氏が次のように書かれている。まず、紹介しておこう。

明治四〇（1907）六・一九、昭和一九（1944）三・一四。小説家。秋田県南秋田郡五城目町生。私立麴町高女卒業。昭和のはじめごろある新聞が若い女性たちに短い原稿を書かせたことから良く名を知られたひとりであった。しかし、そのために、本格的な舞台への進出がえっておくれ、それから十余年間、下積み之苦勞をした。同人雑誌からやり直す決心で、『日曆』『人民文庫』にはいる。『神楽坂』が昭和一一・三月の『人民文庫』創刊号に載

って出世作となった。その他代表作に、「茶粥の記」「家庭教師」などもあり、発表雑誌は『改造』『文学界』級にすすんだ。そして『中央公論』から原稿の依頼のあったときは、もう肺患がつのつて執筆不可能、三八歳で世を去った。親友の大谷藤子とは相互にまだ無名時代に知りあい、生涯孤独と文学修業の伴侶となった。津世子も凝り屋で、繊細な感情と技巧をもち、文芸復興のかけ声の高かった時勢に、市井を描いて客観的な作風を志した。短篇集一〇冊、少女小説集四冊、『婦人倶楽部』持参員として大陸にもでかけた。

この板垣氏の記述は、必ずしも正確なものではないが、気鋭の女流文芸評論家として当時から活躍していた氏の目が、矢田の文学的生涯を簡潔に言いえており面白い。具体的な考証は後に回すことにして、思いつくままに、作家以前の矢田を辿ってみよう。

矢田に、「こんな私」(昭七)と題するモダンな一文がある。

——私の自叙傳を話せ、って？ はい、訊問官殿、では、只今より素直に語るでございませう。(おい、P.C.、火鉢の上へ足なんかのつけちや駄目よ。寝小便をするからね)

一九〇七年六月の十九日生れよ。出生地？ ほ

ら、ハ郎焉ね、何時だったか金子洋文氏が改造へ「赤い湖」って創作を発表したでせう。あんなへ出てくるハ郎焉のすぐ傍の一日市つていふところ、そこを七、八里山奥へ入った五城目が私の故郷なの。秋田育ちの赤毛の娘って譯ね。え、この赤毛は生れつきだわ。……中略……え？ ファター？ 彼は、町助役殿でね、あらゆる官吏の禮儀に従って、彼も矢張り贈物を貰ふのが好きらしくたけど。その點、イワン・イワーヌイッチに優るとも劣らなかつたと思ふわ。父が秋田市へ轉任になつて、私達こまかい兄妹もくっついていつたんだけど、づきに、また東京へ引越さなければならなくて。二番目の兄貴ていふのが、蠹魚^{しむみ}みたいに本が好きでね。その影響で、私も遂その嗜ることだけはね——。十四の秋に、五十何枚かの原稿に字をうめたことはうめたけど。何でも、女學校の同性愛をとり扱ったものだつたと思ふの。今あつたら面白いけど、震災でね——。その頃、一高の祭にゐた兄貴が土曜日毎に歸つてくると、殴り合ひの暇々に、英書のハムレットを讀んで貰つたり、ロメオとジュリエットに涙を流したりしてね。チエホフを通過したのは、十七か八の時だったと思ふわ。而し、彼の柔いあの微笑は、永久に私の側

を去らないでせうけど。——とにかく、若しも私にものをかくほんとの力があるとすれば、それは半介以上、兄貴に負ふところがあると思ふのよ。疏摩書房版『現代日本文学全集87 昭和小説集(二)』の巻末に附されている唯一の矢田の「年譜」によれば、右の一文に相当する時代は、次のようにある。

明治四〇—昭和一九年(1907—1944)六月一九日、秋田縣南秋田郡五城目町に生る。五人兄妹の末子。父鐵三郎は町の助役であつた。大正三年同町小學校に入學。五年に一家と共に上京、東京富士見小學校に轉校。一三年東京麹町高等女學校を卒業。父は長患いの後一四年に死亡。日本興業銀行に二年ほど勤めたが昭和二年次兄の勤務地名古屋へ轉住。この頃から創作に専念し、雑誌『女人藝術』を主に、『新愛知』『名古屋新聞』等に投稿。七年以上京後は新潮社の『文学時代』等に短篇小説を發表するようになった。

次に、関井光男氏の「伝記的年譜」(『定本坂口安吾全集』第十三卷所載)の記事を示す。

本名はツセ。明治四十年六月十五日に秋田縣南秋田郡五城目町字下り町三十五番地で父矢田鉄三郎(慶応二年八月二十一日生)、母千工(明治三年十二月九日生)の四女として生まれ、少女時代を

東京で過し、大正十二年、東京麹町高等女學校を卒業した。一時日本興業銀行に勤めていたが、昭和二年、次兄不二郎(明治三十五年八月二十日生)の勤務地であつた名古屋に移転し、創作に目覚めた。

次に、佐々木美智子氏「暗い青春時代—矢田津世子とのこと—」(新潟縣郷土作家叢書1『坂口安吾』野島出版昭引4)の記事は次の如くである。

矢田津世子は本名ツセ。明治四〇年六月一九日、秋田縣南秋田郡五城目町字下り町三十五番地で父鉄三郎母千工の四女として出生。長姉・三姉・二人の弟は幼逝したため、男三人女二人兄妹の末子として成長した。父は五城目町の助役をしていたが、後、秋田市に移住。津世子の小學校時代に、大養派の政治家であつた父の都合で一家は上京し、飯田町五丁目に居を定めた。津世子は藤見小學校から私立麹町高女に進み、大正一二年三月卒業と同時に日本興業銀行に勤務した。女學校時代の津世子は特に文学少女という程ではなかったという。一二年六月すぐ上の兄を、一四年七月父を失っている。昭和二年四月次兄不二郎氏の転勤(日本徴兵保険—現大和生命)で一家は名古屋に移り、津世子は銀行をやめた。

津世子が文学に興味を持ち出したのはこの頃からで、次兄の影響が大きい。法律専攻の兄が哲学から文学に興味を転じたのは名古屋へ移ってからであり、チェーホフ・ルナール・バルザック等感銘深い作品を次々と妹に勧めた。当時名古屋の文学愛好者は雑誌『第一文学』を発行していたが、兄は翻訳を、津世子も小品を載せている。長谷川時雨の『女人芸術』に参加したのも名古屋時代で……中略……翌、昭和六年東京へ帰り、まもなく一家は下落合四丁目（現中井ニ丁目）の自宅に落着いた。

以上、矢田の自伝に続いて代表的な論述をいくつか示したが、この他にも注目しておくべきものがある。

巖谷大四氏の『物語文壇史下』（中央公論社 昭52.6）の記事は、筑摩版「年譜」をおそらくふまえていると思われるが、矢田が松竹少女歌劇の女優オリエ津坂（当時ターキイ水、江滝子と盛名を競った女性）と従妹であり絶世の美人であった（同様の記事を以前どこかで読んだ気がするが、失念した）ことを伝えている。また、和田日出吉（後出）のいた『時事新報』の懸賞に一等当選したことがある、とも書かれている。先述『現代日本文学大事典』の「ある新聞云々」とは、この『時事新報』である可能性がないわけではないが、

未調査であり、いずれ「黒い噂」を抜かう時に触れる。大河内昭爾氏の「矢田津世子著『茶粥の記』解説」（『おさめしひるめしばんめし』一九七七年春No.10みき書房）には、

父は、秋田魁新報記者で、大養毅と同僚であった。木堂同様のち政界に入り、代議士となった人である。

と書かれている。

高見順『昭和文学盛衰史』（文藝春秋社 昭33）には、

『女人芸術』は地方に支部を作ったが、支部のあったそれぞれが都市で、その頃『女人芸術』派の花形だった人に、名古屋の矢田津世子、広島の大田洋子、神戸の高橋鈴子がいる。

とあり、『女人芸術』系の大田洋子、矢田津世子が『火の鳥』にも書いている、と記されている。『火の鳥』については、板垣直子『明治・大正・昭和の女流文学』（桜楓社 昭42.6）を参照されたい。『火の鳥』は未見である故、今は詳かにしない。

又、『令女界』にも書いているらしい。

既に紙数も尽きた。汗顔の至りであるが、諸兄にお教を乞う次第である。

（一九七七・七・一九）